

# 自己制御学習能力育成を目指したコース運営

衣川隆生

名古屋大学留学生センター

kinugawa@ecis.nagoya-u.ac.jp

## 1. はじめに

本稿においては、筆者が平成16年度と17年度に担当した作文科目について報告する。この科目は、日本語中・上級レベルの留学生を対象に、説明文を書く技能を養成するという技能目標を掲げている。しかし、全学を対象とした日本語補講においては、1)受講生の専門領域が多岐にわたる、2)学部レベルと大学院レベルの留学生が混在する、3)表記、語彙、文法などの形式的知識を基準としてレベル配置された留学生の作文能力にはレベル差が存在する、という多様性がある。このような多様性を有する受講生に対して到達すべき技能目標を一律に設定することは適切ではないと考えられる。

そこで、筆者は、個々の受講生がそれぞれのニーズに応じた作文技能を継続的、自律的に向上させていくことができる自己制御学習能力を育成するという学習目標を設定しコースを運営した。本稿では、この授業のうち、文章と文章産出過程についてのメタ認知知識の意識化、精緻化を目標とした活動を中心に報告する。

## 2. コース運営方針

Zimmerman, B.J. et al(1996)は、自己制御学習のステップとして以下の四つの段階を挙げている。第一段階は学習者が自身の過去の学習経験や能力をモニタリングし、自分に何ができるか、そして何が不足しているかを判断する自己評価の段階である。第二段階は「自己評価」の結果に基づき、具体的な学習目標を設定し、その目標を達成するための方略を計画する段階、第三段階は計画した方略を実行し、その遂行過程をモニタリングする段階、第四段階は方略の遂行が学習結果にどのように影響したかをモニターし、自己評価する段階である。本稿においては、これらの学習過程を循環的に経験しながら学習を進めていく方法を自己制御学習と呼ぶ。そして、このような学習を自律的に進めることができるメタ認知能力を自己制御学習能力と呼ぶことにする。これらの自己制御学習能力を顕在化させるには、まず、学習者自身が学習対象に対して持っているメタ認知知識を意識化することが必要であり、次に、意識化によって得られた情報をもとに、学習目標や方略計画を立案し遂行していくことが必要となる(田中・斎藤, 1993)。

本実践では、75分授業が週1コマ、10週間という時間的制約の多いコースにおいて、これらの学習過程を受講生が繰り返し経験することを実現するため、以下のコース運営方針を立案した。1)全ての受講生は文章や文章産出過程についてのメタ認知知識を持っている。2)これらのメタ認知知識は「文章化する」という活動を通して意識化することができる。3)同時に、文章化の過程を通して、それ以前には考えても見なかった表象にも新たに気づく可能性がある(内田, 1995)。このように既有知識が吟味され新たに組み替えられたり再構成されたりした結果、文章や文章産出過程についてのメタ認知知識が精緻化される。

次に、このコース運営方針に基づき、以下の学習活動を循環的にスケジュールに組み込むこととした。

### 2.1 準備活動

準備活動とは、「どのような文章を、どのように書き上げるか」に関するメタ認知知識を意識化することを目的とした活動である。本実践では、「どのような文章を」についての表象を「文章についての目標」、「どのように書き上げるか」についての表象を「文章産出についての目標」と呼ぶ。さらに、目標を達成するために選択する方法、手段を文章産出過程における方略と呼ぶ。例えば、「説明文とは物事の関係や仕組みを正確に客観的に、そして読み手にわかりやすく伝える文章である」というのは「文章についての目標」の一例であり、「読み手に理解しやすい文章」にするために「平易な言葉を利用する」「一つの段落には一つの話題だけ述べる」というのは文章についての目標を達成するための方略の一例である。

一回目の作文の準備活動においては「文章産出についての目標」の意識化を目的として「ゼミの課題やレポートをどうやって書いて提出するか」というアンケートを、二回目には「文章についての目標」の意識化を目的として「よい説明文とはどのような文章か」というアンケートを与え、その結果についてグループで討論を行った。討論においては、受講生同士でアンケート結果を比較し、結果が異なる場合には、どちらの書き方や文章構成のほうがいいのか、また、どうして自分はそう思うのかの理由を説明することを求めた。

## 2.2 作文

第二段階は準備活動の結果を参考にしつつ実際に文章を産出する段階である。

一回目の課題としては『ゼミの課題やレポートの書き方』のマニュアルを、二回目の課題としては「いい説明文とは」を提示した。受講生は準備活動で意識化された目標、計画された方略に基づいて文章を産出していく。それと同時に、ある時点までに書き上げた文章や使われた方略をモニターし、自身が立案した目標や方略を評価の基準として参照しながら、それらが効果的かどうか、問題はないかなどを評価する。そして、評価結果に基づいて次の下位目標を立案したり、何か問題が生じている場合には、その問題を解決するように新たな下位目標を立案したりする。

## 2.3 フィードバック

第三段階は授業でのフィードバック活動である。この段階においては「方略遂行」が学習結果にどのように影響したかをモニターし、自己評価する。そして、その結果にもとづき新たな「目標設定」「方略設計」が行われるような活動を行う。

『ゼミの課題やレポートの書き方』のマニュアルという課題では、受講生自身が書いた文章から文章産出過程における方略を抜き出し、チェックリストを作成する。次に、実際の文章産出過程において、それらの方略を実行したかどうかをモニタリングし、そしてそれぞれの方略が有効であったかどうかを自己評価する。その結果にもとづいて、次回にはどの方略を自覚的に利用しなければならないかの「目標」と「方略」を設定することを求めた。

「いい説明文とは」という課題では、受講生自身が書いた文章から「説明文の評価基準」となる項目を抽出し、それに基づいて自分自身の文章、及びクラスメートの文章の評価を行うことを求めた。評価の際には、それぞれの文章で訂正すべき点だけでなく、参考にすべき点も抽出することを求め、その結果を参考にし、次回の提出時までにはどう推敲すればいいかという「目標」を設定することを求めた。「文章の書き方のチェックポイント」及び「説明文の評価基準」は、授業での活動を参考に改定していくことも奨励した。

## 2.4 推敲

上記のフィードバックの結果を参考に、作文を推敲し、ネイティブチェックを受けた上で再度提出するこ

とを求めた。1 回目～4 回目の課題作文に関してはフィードバックを二週に渡って行い、第三稿までを提出することを課題とした。

### 3. 結果と考察

上述の学習活動を行うことによって、文章と文章産出過程についてのメタ認知知識にどのような気づきや変化があったかを受講生のインタビューと学習成果報告に基づいて分析する。インタビューはコース終了後に受講生に依頼し、そのうち協力が得られた受講生 5 名に対して個別に約 30 分ずつ行われた。インタビューは筆者が行い、その結果は全て録音され、後日文字化された。インタビューでは、教材、作成原稿及びフィードバックを参照しながら、それぞれの活動を行うことによって、文章、文章産出過程についてどのような気づきや変化があったかを思い出せる限り述べてもらう方法を採用した。学習経過報告は、学期終了後に受講生に「このクラスで、何が身に付いたか、自分で、何を考えるようになったか、意識できるようになったか、どんな学習方法が身に付いたかを報告してください。」という自由記述の形式で収集した資料である。

#### 3.1 文章産出過程の意識化

第一回目の作文課題は「『ゼミの課題やレポートの書き方』のマニュアル」であった。さらに毎回の授業では、自分自身が作成したマニュアルをチェックリストとして、必要な方略を活用したかどうかを自己評価する時間を設けた。これらの活動について次のようなコメントを得た。

日本語で文章を書いていてアイデアが出て、書いてプリントアウトしてからまた書き加えてという作業をこの授業をうけてから意識的にやるようになった。

どの文章でもまずどういうことを書けば課題に合うと考えます。つぎは文章がどういう順で書くメモします。最後キーワードをいれながら、文章を書きます。うまい作文じゃないかも、理解しやすい文章が出来ると思います。

「説明文を書くときどういう手順で書くか」という質問をされる前は、はっきり言ってそんなことをそこまで突っ込んで考えたことはなかった。授業で日本語の文章を書くときの手順を覚えて、中国語の文章を書くときも同じような手順でしたら、私にとってはすごく書きやすかった。

これらのコメントから「マニュアル」を書くという活動によって、それまで考えたことがなかった文章産出過程について自問自答する機会が生まれ、その結果文章産出方略を意識的に利用できるようになったことがわかる。さらに、意識化された方略を第一言語作文にも応用しその効果があるという指摘は、その方略が課題に限定されたものではなく、応用可能なものであることを示唆するものである。

さらに、本授業では、文章産出過程だけではなく、書き上げた後の推敲方略の意識化にも焦点をおいた。その活動については以下のようなコメントを得た。

先生のコメントからいろんなアイデアが出てきた。音読するとか、文法をチェックしてもらうことの重要さとか、ポイントをつかみやすい文をどうやってかくとか、そういうことは勉強になった。

#### 3.2 文章の意識化

第二回目の作文課題は「いい説明文とは」であった。また、その作文作成以降は受講生自身の「いい説明文」の定義に従い、説明文の評価基準を作成し、その評価基準に基づいて自己評価及びクラスメートが書いた作文を分析、評価する活動を行った。この活動の目的は、文章構造や表現の使い方についてのメタ認知

識を精緻化させることにあった。この活動の結果受講生は以下のような認識を得たと述べている。

文章を書くとき、前より序論の部分は何を書こうか、そして本論、結論の部分は何を書こうかということがかなりはっきりするようになった気がする。

自分の作文の弱点を見つけました。キーワードがないことまた文章の最初の部分はこの文章をなんについて書く、どういう順番で書くがはっきり書いていないです。それを頭に考えながらメモをしました。そのメモを見直し後で書くと文章が見やすくなる。これから、私はずっとその方式で文章を書くと思います。

一番勉強になったことは読み手のことを考えることである。具体的に言えば、「文章の読み手はどんな人だろう」、「文章を通じて読み手が何を期待しているか」、「どうやって読み手に理解してもらう」と自分を読み手にし、考えながら文章を書くことである。

また、どのような経験がこのような意識化を生じさせたかに関しては次のように述べている。

さんの文章を読んでとてもはっきりしていて、見習わなくてはならないなと思った。反対に、別の作文では、説明文の中にはマニュアルじゃないこと(情緒的な表現)を入れるとわかりにくいということを感じた。

ちょっと段落がはっきりしていない人がいた。文が長くて難しい漢字もたくさん出てくる。こういう文章を見ると、とてもわかりにくいと感じた。文章を短くして、複雑な漢字を使わないようにしようと思った。

これらのコメントから、他者の作文を読んで分析、評価するという活動は、文章構造や表現の使い方についてのメタ認知知識を精緻化させるためには効果が高いことが示唆される。同時に、他者からのフィードバックも自分自身の作文に他者の視点を組み込む上で有効であることも示された。

#### 4. 今後の課題

以上の結果から、本実践の学習活動は、文章と文章産出過程についてのメタ認知知識の意識化、精緻化に効果があったと考えられる。しかし、作文技能を継続的、自律的に向上させていくことができる自己制御学習能力を育成するという目標を達成できたかどうかは今後の受講生の作文技能を観察していかなければ把握できない。今後は、これらの継続的な調査も必要である。

#### 引用文献

内田伸子(1995)「談話過程」大津由起夫(編)『認知心理学3 - 言語 - 』東京大学出版

田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際-学習支援システムの開発-』大修館

Barry J. Zimmerman, B.J., B. Sebastian and K. Robert(1996)*Developing Self-Regulated Learners: Beyond Achievement to Self-Efficacy (Psychology in the Classroom)*, Amer Psychological Assn.

付記：本稿は、2005年3月19日に東京工業大学において開催された「日本語教育方法研究会」において発表した内容に大幅に加筆、修正したものである。